
暖かい手

水無智也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暖かい手

【Nコード】

N0718F

【作者名】

水無智也

【あらすじ】

猫獣人のユウは自殺を試みるが未遂に終わる。出会った看護師や主治医、友達となるカイとの触合い立ち直って行き、数々の苦悩を乗り越え立ち直ってゆく。

自殺（前書き）

全体的にシリアスで重いストーリーで、ところどころ同性愛的な描写もあります。

観覧の際はご注意ください。

自殺

生きている事が嫌になった・・・
もう死にたい・・・。

それが僕の考えた結末だった・・・
もう生きていても何もいい事はない・・・
手に持ったナイフを眺めながら僕はずっと考えていた。

少年の名前は持田友太という名前で中学1年生の猫獣人。
友太（以下…ユウ）はいじめられっ子で、靴を隠されたり、
意味も無く殴られたり、かけているメガネを盗られたり・・・。
彼はそんなイジメに対して戦ってきたが、もはや先生や親も相手に
してくれない始末。
だから彼は自殺することを決意していた。

「・・・さようなら」

僕は腕にナイフを突き刺す。

手首ではなく、二の腕をナイフで切りつける。

赤い血が吹き出て、僕の体を汚す。

ここは誰も居ない夜の川原だから、誰も来ない・・・来る筈も無い。

「僕が生きていても、みんなは不幸なままだし・・・」

薄れ行く意識の中僕はボソツと呟いた。

すると涙が出てきた。

「さよな・・・ら・・・父さ・・・母さ・・・ん・・・」

そして僕は目を閉じた。

目覚めてそれから

目を開けると、見知らぬ白い天井があった。

そして独特の薬の様なにおい・・・。

(病院・・・?)

僕は確信した。

だけどどうして?あの時死んだはずじゃ・・・。

「大丈夫?」

不意に声を掛けられ横を向くと、女性の猫獣人の看護師に声を掛けられた。

僕は声が出ず、首を縦に振った。

僕は生きている。でも、何で・・・。

「あなた、川原で倒れているところをお巡りさんが見つけたのよ。そしたら出血多量だったから、危なく死に掛けていたって・・・」

僕はその言葉を聞くと、もう何も考えられなくなった。

集中治療室で僕は2日も眠っていたらしくて、その間に父さんと母さんも来たらしい。

でも、二人ともショックを隠しきれないようだったって・・・。

当然だよね・・・僕死のうとしたから・・・。

意識が戻ってからどのくらいたったか分からないけど、僕は病室に移された。

二人部屋だけど、今は僕一人だけだった。

「最初は一人じゃ寂しいと思うけど、明日ここにもう一人来るの。だから安心してね」

さっきの女性看護師さんはニコリとして僕に話しかけるけど、僕はただ無表情で頷くしかなかった。

夕方になって父さんと母さんが僕の様態を見に来た。

父さんは僕を見て涙を流し、母さんは号泣していた。

僕は何だか申し訳なかったけど、何も言えなかった・・・。

その日の夕飯は、野菜炒めと味噌汁とご飯だったけど、僕は食事も喉を通らなかった。

病室に運ばれてからずっと、これからの事を考えていたからだ・・・。

（どうせ僕をバカにしに来るに違いない）

僕はクラスのみんなが来る事に恐怖を感じていた。

母さんが荷物を持ってきてくれた時にその話をして、僕は否定したけど、

みんながそうしたいって言うから、仕方なく了承した。

夜になって僕のクラスの担任といじめっ子のツバサがやって来た。

ツバサは犬獣人で僕とは幼馴染だったけど、小学校の高学年からいじめっ子のリーダーになっちゃって。

僕はツバサに抵抗して以来、いじめられるようになった。

「ごめんなさい・・・」

ツバサが僕に謝るけど、僕は無視していた。

「オレ、お前にめっちゃめっちゃ酷い事してしまった。友達だから許さ

れると思ってた・・・」

ツバサは嗚咽混じりに話すけど、僕はまだ口を開かなかった。

「ごめんなさい・・・ユウちゃん。ごめんなさい！ユウちゃん！ごめんなさい！！！」

ツバサは僕に土下座をした。

だけど僕は許さなかった。

裏切られたから・・・僕を裏切ったから・・・。

結局、担任も僕に謝ったけど、終止、僕は黙っていた。

二人が帰った後僕はずっと考えていた。

何である時、もっと人に見つかりにくい場所で死ななかったんだと・・・。

出会い

目が覚めると朝だった。

いつの間にか眠っていたらしい。

昨日の女性看護師さんが血圧とか検温とかしに来てくれたけど、僕はいまだに沈んでいた。

「どう気分は？」

「・・・」

話しかけてきたけど僕は声が出なかった。

というか放っておいてほしかった。

惨めな自分を・・・。

「・・・ユウタ君、今日先生とカウンセリングをするからね・・・」

「・・・カウン・・・セリン・・・グ・・・？」

僕は途切れ途切れだけどようやく声が出た。

そんな僕を見て看護師さんは笑顔になった。

「よかった、やっと喋ってくれたね」

・・・僕は赤ちゃんじゃないですよ（泣

朝飯を食べ終わった僕はすぐにメンタルケアの先生のいる部屋に向かった。

血が少ないせいなのか、ちょっとふらふらするけど、

廊下の手摺をつかみながら何とか頑張った。

メンタルケアの先生は高谷先生といって、若いお兄さんだった。背が高く、何だか格好良くて、それに優しく喋りやすい感じだった。僕は自殺をした経緯を途切れ途切れで話していたけど、

高谷先生はしっかり聞いてくれた。

「そうか・・・」

高谷先生は悲しそうな表情だったけどすぐに僕に向き直ると

「君は相談する相手が居なかったのかい？」

そんな質問をされた。

実際、自分自身の問題だったから親に相談しても先生に相談しても無駄だと思っていた。

僕は頷いたら、先生は、

「分かった。これから君の相談者はこの私が引き受けよう！」

っと手を握って笑顔で言ってきた。

そんな先生をみたら僕の沈んでいた気持ちも少し晴れた気がした。

病室に帰ると見知らぬ荷物が置いてあった。

（ひょっとして、今日入るって言ってた人か・・・）

僕はそう考えると少し不安になっていた。

すると、女性看護師さんが入って来て、

「あら、ユウタ君。今日から一緒に部屋のなる中川魁くんよ」

看護師さんに続いて、トラの少年が入ってきた。

背は僕と同等低めで、子供っぽい顔つきから小学生と確信した。

僕は軽く会釈すると、相手は笑顔でお辞儀をした。

「よろしく」

明るく返事をされちゃった・・・。

その日はいろいろあったからすぐに眠ってしまった。

カイちゃんと僕

昼間に寝てから、夕方に目を覚ます。

僕は起き上がると窓の外を眺めていたけど、尻尾をつかまれた感覚がありびくつとする。

「・・・何のようですか？」

「あ、ごめん」

僕は少々怒ったような言い方をしてしまったらしく、相手はすぐに謝る。

だけど、すぐに開き直って僕に質問してきた。

「ねえ、なんて名前なの？」

「・・・え？持田友太・・・」

「ふくん、ユウタくんっていうんだ。オイラは中川魁なかがわかいっていうんだ！」

「カイ・・・いい名前だね。よろしく・・・カイ君」

「んもう！カイちゃんていいよ！お！こっちこそよろしくユウタ君！」

「僕もユウちゃんていいよ・・・」

ある意味うれしかった。

まさか、こんな早く友達・・・、いや、どうせ僕を裏切るに違いない！

僕の中で複雑な波が漂っていた。

夕方に母さんが見舞いに来てくれて安心した表情で居た。

「ユウちゃん。学校ではみんな心配しているらしいわよ」

「ふくん」

僕はその話に不機嫌そうに返事を返した。

母さんは仕方が無いという表情をしていたが、カイちゃんがチラッと僕たちを見ていた。

「もしかして学校が嫌になって・・・」
「・・・」

母さんが帰った後、カイちゃんが僕に訊いて来た。

「でも仕方ないよね。小学校ってイジメとか多いだろうしね・・・」

「僕、中1だけど」

「え？」

カイちゃんは驚いた表情をしていたけど、僕にはその理由が分からなかった。

やっぱり僕って、小学生に見えるのかなあ・・・。

「そっかあ、オイラと同じなのに。大変だね。」

カイちゃんは納得したように言った。

ん？オイラと同じ・・・？

「え？カイちゃんって何年生？」

「んお？オイラは中2だぜ」

それを聞いた僕は爆弾を落とされた気持ちになった。

うそ・・・友達だと思っていたのに・・・先輩だったなんて・・・。

「ん？どうしたん？」

「・・・ごめんなさい」

「うえあ!？」

僕が詫びるとカイちゃんは間の抜けた反応をする。

「僕、先輩にちゃん付けで・・・」

「え？ああ、気にするな！学校じゃあるまいし」

「だけど・・・」

「真面目だなあ。ここじゃあおいらたちは友達だろ？」
友達だろ？

その言葉に僕は涙を流す。

「ユウちゃん？」

「・・・ひっく、ありが・・・とう・・・うう・・・」

嬉しかった。こんな僕を友達だと思ってくれる事に。

涙はとめどなく流れて、止ってほしかった。
すると不意に暖かくなった。

カイちゃんが抱きしめてくれたからだ。

「泣けよ・・・」

「・・・うえ？」

「大丈夫だ。泣いてもいいよ・・・」

「・・・うえええっ」

カイちゃんに抱かれながら僕は声を上げて泣いてしまった。
今まで溜まっていた涙がすべて流れて・・・。

カイちゃんは優しくかった・・・。

なんだかんだでこれから迷惑をかけそうかも。

約束

入院してから1週間くらいたった。

僕の状態も回復して行っただけ、まだまだ入院生活は続くらい。

その間にもカイちゃんや高谷先生、また女性看護師さんとも仲良くなった。

あ、ちなみに女性看護師さんは岩城さんと呼んでいます
ツバサもたまに見舞いに来てくれて、だいぶ関係も解消されてきた。

「ねえ、カイちゃんはどうして入院しているの？」
「え？」

僕が聞くと、カイちゃんは真剣な表情で僕に話しかける。

「実は・・・おいら、肺炎なんだ・・・」
「肺炎って・・・」

カイちゃんは俯いてしまった。

肺炎・・・聞いた事のあるような病名だった。

ここ最近のカイちゃんはなんだか辛そうだった。

たまに咳もして、熱もあった。

「何で、おいら・・・ゴホ！う！ゲホッゲホッ！」
「！！カイちゃん！」

カイちゃんが突然発作を起こし、あわててナースコールを鳴らした。

その後、岩城さんとカイちゃんの主治医がやってきて処置をしてくれた。

僕は処置をして眠っているカイちゃんを見て安堵した。

「ありがとう。もしかして聞いたの？彼が肺炎だって事」

「うん」

岩城さんが僕に尋ねると僕は素直に頷いた。

するとカイちゃんの主治医が僕に話してきた。

「すまないが、カイくんの事をお願いしてくれるか？」

「ちよっと先生！？」

「たのむ！」

カイちゃんの主治医は僕に頭を下げるが、岩城さんは納得していないようだった。

だけど僕はいつの間にか首を縦に振っていた。

「ユウタくん！？」

「岩城さん、カイちゃんは・・・友達だから。助けてあげたい」

僕の真っ直ぐな言葉をぶつけると、岩城さんも流石に仕方が無いという表情になった。

その夜、ユウタはカイと会話をしていた。

「ごめんね。ユウちゃんに迷惑かけちゃうな・・・」

「そんな事ないよ」

僕はずっと考えていた。

世の中には病気で苦しんでまで生きようとしている人たちがいっぱいいる。

なのに僕はそんな人たちとは違い、自ら希望を捨てて死のうとしたんだ・・・

僕は弱かった、バカだった。

僕はカイちゃんの手を握り真剣な表情をした。

「え？」

「カイちゃん、約束して」

「約束？」

「退院するときは二人で元気よく退院するって」

僕は握っている手を強くするが、突然頭痛を感じて頭を抑える。

「ユウちゃん!？」

「・・・約束・・・して・・・」

頭を抑えながらも僕はカイちゃんに問いかける。

カイちゃんは目に涙を溜めて、「うん」と言ってくれた。

カイちゃんは点滴を打ってもらって、回復しているみたいだけど、僕はその後更に地獄に突き落とされる事を知らなかった。

絶望と希望

入院から2週間後、ある雨の日。

僕はカウンセリングを受けていたけど、何だか不安だった。

ここ最近異様に気分が高まって、自分でもおかしいと思っていたのだ。

そして高谷先生に爆弾発言をされた。

「率直に言う。君は脳に障害をもった可能性が高い」

高谷先生はそんな事を言った。

「何で・・・」

「猫獣人は脳が弱くて細菌が入り込むだけで体に異常が起き易い。君は入院から何日目で普通に話せるようになった？」

「え？」

そういえば最初はしどろもどろだったけど、いつの間にか・・・。

「多分、1日か2日で」

「やはりな。この症状は猫族躁鬱症候群というんだ。

うつ病の一種だが脳の障害とも言われている」

「・・・」

「信じられないかもしれないがあくまで可能性だ。

完全に決まったわけではないから大丈夫だよ・・・」

僕は絶望せざるおえなかった。

猫族躁鬱症候群（略してCMA）は聞いた事あった。

この病気になった猫獣人は半永久的に直る事は無く、一生苦しむという。

頭痛がよく起きるのもこれが原因だと確信した。

「ユウちゃん？」

「・・・」

病室に戻ってカイちゃんが話しかけてきても、僕は落ち込んでいたので話せなかった。

「ユウちゃん、どうしたの？何があったんだ？」

「・・・あのね」

僕はカイちゃんに事のすべてを話す。

話し終わるとカイちゃんは心配そうな表情を凍りつかせた。元氣になって一緒に退院しようって約束したのに・・・、あわす顔が無いよ・・・。

「大丈夫だよ。完治しなくても薬とかあるって聞いた事あるし・・・」

「・・・」

「それに、先生も可能性って言ってんだろ？だったらまだ大丈夫だし・・・」

「・・・」

「だからさあ、あんま本気にしすぎるのも・・・」

「・・・」

「・・・なあ、元氣出してくれよユウちゃん・・・」

「・・・うん」

うつ伏せになっていたから、声を出しても籠っていた。するとカイちゃんは僕のベッドに腰掛けて、僕の頭を撫でる。

僕は顔を上げると、優しく微笑んだカイちゃんが居た。

「大丈夫だよユウちゃん・・・」

「・・・うん」

僕は情けない返事しか出来なかった。

カイちゃんは容態が良くなっていて、あと少しで退院できるらしいのに……。

・僕はカウンセリングでやった検査が分かるまでは入院するなんて・

僕は夜中目を覚ました。

カイちゃんは寝ているようで、寝息が聞こえてきた。ベッドで横になったまま考えていた。

自分は自殺をしかけて、結局障害を持ってしまった。

「……自業自得」

そう自分に言っていると、枕に一発拳をぶつける。するとベッドが軋む音がしてしまった。

「……ん？ ユウちゃん？」

軋む音でカイちゃんが起きてしまった。

「！ごめん、カイちゃん。起こしちゃって」

僕が謝るとカイちゃんは

「実はさ、寝たふりしてたんだ。だからずっと起きてた」
カイちゃんはニシシシと笑っていたけど、

「ユウちゃん。過ぎた事は仕方ないよ……」

すぐにカイちゃんは真面目な口調になって話してきた。

消灯時間をとくに過ぎているので部屋は暗かったけど、月明かりが僕たちを青白く照らす。

「だからさ、頑張ろう。おいらも頑張って肺炎治すから」

「……うん」

「おいらが先に退院しても、ちゃんと見舞いとかしてやるから」
「……ありがとう」

僕は嬉しくて、やっと笑う事ができた。

でも、メガネを取っていたからちよつとカイちゃんの顔はぼやけてたけど。

僕はその後すぐに寝ちゃった。
でもその夜はすっきりと眠れたと思う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0718f/>

暖かい手

2010年10月14日02時13分発行